

特集 今こそ読みたいディストピア小説の名作

ジョージ・オーウェル

『一九八四年』

刊行から70年以上を経た今も、世界中で多くの人に読み継がれている『一九八四年』。作者の生まれたイギリスでは「読んでないのに読んだふりをしてしている本」の第一位だとされる一方で、2016年の米大統領選で当選したトランプ氏の就任式の際には、米アマゾンで売り上げが急増しました。全体主義的体制や監視社会の再来によって、本書への注目度がますます高まっている今、本特集で『一九八四年』の世界を原文で味わってみましょう。



執筆：川端康雄
(日本女子大学文学部教授)
イラスト：赤 (p.47, p.50)
編集：上野華歩

George Orwell

ジョージ・オーウェルの 生きた時代と作品世界



20世紀の世界戦争の時代に生きた、英国作家のジョージ・オーウェル。『動物農場』や『一九八四年』が代表作として知られるが、ほかにも多くの小説、エッセー、ルポルタージュなどを執筆している。戦争、権力、支配、貧困などを当事者として体験した彼の作品は、当時の人々や社会を明敏に観察しており、今も世界中の人々を魅了し続けている。

『一九八四年』的世界を示す言葉 「Orwellian (オーウェリアン)」

2017年、トランプ米大統領就任式の聴衆数が誇張されて発表された際、当時の大統領顧問が「オルタナティブ・ファクト（もう1つの事実）」という言葉を用いて正当化した。それに対して一部のメディアは、嘘を真実として語ろうとする政権側のこの行為を「Orwellian (オーウェリアン)」と呼んだ。

作家名に接尾辞-an (-ian, -ean)を付して形容詞化（また普通名詞化）した語が一般化するケースはそれほど多くない。Shakespearian（ウィリアム・シェイクスピア的な）、Dickensian（チャールズ・ディケンズの的な）、Joycean（ジェイムズ・ジョイス的な）といった語が挙げられるが、Orwellianという語ほど人口に膾炙した例は他にないのではないだろうか。Orwellianは「オーウェルの作品のようなディストピアの世界、全体主義的な社会」を形容するときに用いられる。冒頭で挙げたように、近年さまざまなメディアでこの語に出会い、その頻度はとみに増しているように見受けられる。

ジョージ・オーウェルの 生きた時代

Orwellianという語はもちろん、イギリスの作家ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-'50）に由来するのだが、これは彼が29歳のときに採用したペンネーム（筆名）で、本名はエリック・アーサー・ブレア（Eric Arthur Blair）という。彼が生きた20世紀前半は、第1次世界大戦（1914-'18年）、ロシア革命（1917年）、ソビエト連邦（ソ連）成立（1922年）、1920年代末頃からのソ連におけるスターリン独裁化と'30年代の大粛清、およびウクライナでの飢餓テロ（ホロドモール）、またイタリアのムソリーニ、ドイツのヒトラーらによるファシズムの台頭、第2次世界大戦（1939-'45年）、そして戦後の米ソ冷戦初期に至る、まさに激動の時代であった。

